

## 『455×530mmのシカイ』 - 古月翠

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

それは、いわゆる一目惚れというやつであった。



あれは、十二月の事だったか。授業が一限分早く終わったその日の夕方、何となく遠回りをして帰ろうと思い、私はいつもと違う道に入った。普段は通らない道を歩くと思いがけない発見をする事が時々あるので、私はこうしてあてもなくぶらつくのが結構好きだったりする。その日もそうだった。何気なく角を曲がり、夕陽の眩しさに手をかざ翳した私は、その先にとある店を見つけたのだ。

ふらりと、店の前に立つ。古い木造のその建物は、昔宿場町だったとかで古い町並みが残されている、この辺りの景観に溶け込んでいた。二階の窓には夕焼け空が映り込み、目の前のガラス戸も光を反射しているので中がよく見えない。

(こんな店、こんなところにあっつけ?)

この辺りは前に二、三度歩いた覚えがある。けれど、そのときにはこんな店は無かったような気がする。そう思いながら、近づいてガラス戸の上にかげられた木製の看板を仰ぎ見る。まだ灯りの点っていない乳白色のちょうちん提灯に挟まれたそれには店名が書かれているようだった。しかし、達筆である上に所々掠れていたので残念ながら私には読めなかった。私は何かに引き寄せられるように一歩進んで、年季の入った木枠に手を掛け、戸を引いた。それはもうほとんど無意識のことで、後で自分自身でも驚いたものだった。

夕陽が射し込み色に満たされた店内には、ありとあらゆる物が、壁に、床に、戸棚にずらりと並んで私を出迎えていた。狐のお面に、いくつものランプ、細工の施された皿、鈍く光るしんちゅう真鍮の造花。高そうな物からどのように使うのかさえ分からない物まであるその光景は、統一感が無いようなあるような、そしてどこか浮き世離れたものだった。店主は今いないのか、人の気配はない。

何気なくこはく琥珀色に染まった商品たちを見て回る。そして、私はある場所で足を止めた。それが視界に入った瞬間、矢で心をいぬ射貫かれたような衝撃が私の中を走り、それから目が離せなくなった。

そう、一目で私はそれに魅了されてしまったのだ。

「綺麗……」

思わず私はため息をついてしまった。私の目の前にあったそれは、脇に抱えられる程度の大きさのキャンバスに描かれた、美しい花が咲く木の絵だった。遠くに描かれた湖は星空と山々を映し出し、夜闇に沈む草原の中、一本だけ生えたその木は満開の白い花を咲かせ、淡く幻想的な色合いで描かれたその花は光をまと纏っているようだった。一日中この絵を見ていてもきっと私は飽きないだろうとさえ思った。見る角度を変えれば、それに合わせて絵の表面を艶やかな光沢が踊った。欲しい、何がそんなに私を惹きつけるのかは分からないが、衝動的にそう思った。それにこの機会を逃してしまったら、もうこの絵には会えない気がした。

(けど、きっと高いよね……)

私は美術品に明るくないが、こんな骨董品店のような店に置いてあるくらいだからきっと値が張る物なんだろう。多分、学生の私には手が届かないぐらいに。つまり、私はこの絵を諦めなければならぬということだ。そう思うと、自然とため息が出た。こんなにも心引かれる物が目の前にあるのに、手に入らないなんて、と。

「そのハナミズキの絵がどうかしましたか？」

そう、急に声をかけられて、私は肩をビクリと跳ねさせた。すぐに振り返ると、いつの間にか私の真後ろに、このご時世には珍しい紺色の着流しに、白い帯を締めた三十代ぐらいの男性が立っていた。つり目気味で、中途半端な長さの黒い髪。背は私より頭二つ分ぐらい高い。どことなく胡散臭いような、それでいて浮き世離れた、ま

るでこの店のような雰囲気を感じた人だった。その人は驚く私に、自分はこの店の店主だと名乗った。

「この花、ハナミズキって言うんですか？」

「ええ。で、どうですか？ その絵が気になるんでしょう？」

「ああ、はい……けど今、手持ちがあまりありませんし……」

すると店主は私の顔をまじまじと見つめ、ふむ、とあご顎に手を当てて少し考える。そして、私の学生鞆を指さしてこう言った。

「その鞆の中、内側の一番小さいポケットの中に、何か入っているでしょう。出してみてください」

ほら、早く早く。と促されて、私はいぶか訝しく思いつつもごそごそと鞆の中を漁る。すると、確かに店主が言った通りの場所に、何かが入っていた。つるりとした感触と微かな冷たさが、指先から伝わる。中指にそれを引っかけて取り出してみると、それは猫の形をした指輪だった。アンティークゴールドのしなやかな体に、つるりとした丸くて黒い瞳。輪の部分が猫の尻尾になっている。確か、数週間前にフリーマーケットで買ったものだったか。鞆のポケットにしまったまま、すっかり出すのを忘れていた。これのことですか、と差し出すと、店主はそれを受け取ってしげしげと眺め始める。そしてしばらくすると、うん、これなら問題ない、とうなずいた。

「どうでしょう？ この絵のお代として、この指輪をいただくというのは」

そのときの私はといえば、いきなりのことについていけず、きつとぼかんと口を開けて間抜け面を晒していたことだろう。

「いいんですか！？ それフリーマーケットで、五百円ぐらいで買った指輪ですよ！？」

思わず私は大きな声を出した。もしその絵がどれだけ安かったとしても、それは釣り合わないんじゃないのか。店主の指につままれていた指輪に視線を落とす。もしかして実はこの指輪、結構な掘り出し物だったのだろうか。そう言うと、店主は首を横に振った。

「いいえ、世間一般的な価値基準では、この指輪の価値はそう高いものではありません。値段を付けるなら、普通の指輪より少し安いぐらいでしょう。けれど、この店での価値基準からすれば十分価値の高いものですし、第一この店では商品のお代をお金で払う事ができませんから、値段なんてものはほとんど無意味です」

店主の言っていることがよく分からなくて、首をひねる。この資本主義社会においてお金で払うことができない、とはどういうことか。指輪をいったん私の手に戻し、壁から絵を外す店主に問いかけてみた。

「まあ、古い決まり事ですよ。この店では世の中の基準ではなく、この店独自の基準でものの価値を計り、その価値が互いに等しい場合のみ、取引をすることになっているんです」

「この店の、基準？」

「申し訳ありませんが、それについて詳しくは話せません。企業秘密というやつです」

そこで店主は人差し指を唇に当てて、いたずらっぽく笑った。そしてさらに話を続ける。

「ただ、一つ言うならば。硬貨や紙幣は、ありとあらゆるものにとって代わることができます。けれど、この絵やその指輪には、代わりなんてそうそうありません。何の代わりにもなれるものと、代わりがほとんどないもの。この二つの価値が、果たして等しいなどと言えるでしょうか？」

はあ、と私は生返事をする。「じゃあ、代わりがない、とは？」とさらに私は問いかけた。すると店主はその手に持った絵を見つめ、目を細めた。

「この絵には、ある人が、大切な人に向けた想いがこもっているんです。そんなものに代えられるものなど、そうはないでしょう」

その声は、それまで聞いた中で一番暖かい声色をしていた。

あまりに胡散臭い話ではあったが、その絵を手に入れる事ができるという誘惑に抗う事はできず、結局指輪を渡して私はその絵を受け取ってしまった。店を出るときに「ありがとうございました。けど、本当にいいんですか？」と私が言うと、店主は「いえいえ、こちらこそありがとうございます。ええ、いいと思わなければこんなことしませんよ。それに、きっとその絵は貴女以外には貰われたがらないでしょうし」と答えた。

私以外には、とはまたどういうことかと聞いた。

だが、店主は「まあ、そのうち分かりますよ」と笑うだけで答えてはくれなかった。

帰宅するまでの間、少し冷静になって店主が言っていた様々なことを考えた。けれど考えれば考えるほど、それについて理解はできるがどこか納得がいかず、なんだか腑に落ちない思いだった。何度かやはり絵を返しに戻ろうかとも思ったが、結局その絵を大事に抱えたまま私は帰宅してしまった。家に入るとどっと疲れが押し寄せてきた。そして私は絵をタンスの上に立て掛けて、何事もなく眠りについた。



「う、ん」

目蓋の間から射し込む光と、微かに漂うつんとした臭いで私は目を覚まし、数度瞬きをする。目の前に蛍光灯で照らされた白い天井が見えた。

(あれ、電気、消さなかったっけ?)

そう不思議に思い、起きあがろうとして伝わってきたベッドの堅さに違和感を覚えつつ、寝ぼけ眼で顔を上げる。次の瞬間、目に映ったものに私の身体は固まった。

なぜなら、そこでは見知らぬ同年代の男の子がうんうんと唸りながら座卓の前で何かを考え込んでいたからだ。

「……うわああああ！」

一呼吸おいて、私の叫び声が部屋に響きわたった。不法侵入、誘拐、変質者……などなど、なかなか物騒な単語が頭の中を駆け巡る。誰だこの人、誰だこの人、誰だこの人！ 驚きすぎて声にできない思いを、そう心の中で繰り返しながら、後ずさる。取り敢えず現状を把握しようと辺りを見回して、私は二つのことに気が付いた。一つはそこが見慣れた自分の部屋ではなく、見知らぬ家具が並ぶ誰かの部屋であるということ、もう一つは見下ろした自分の体が透けているということだ。自分の部屋でないという事は、きっとこの部屋の主はさっきから私が騒いでいるのを気にせず、唸り続けている彼なんだろう。と、訳が分からなすぎて逆に冷静になってきた頭で私は考える。しかし、問題はもう一つだ。腕も足も胴も髪の毛の先に至るまでも全てが、磨りがらす硝子のように向こう側がうっすら透けているのである。まるで幽霊みたいだ。もしかして私は寝ている間に死んでしまったのか、と一瞬考えたが、その考えをすぐに思考の隅っこに追いやった。誰だって自分が死んでいる可能性なんて考えたくない。

しばらくして少し落ち着いてきた私は、さっきからこちらを振り向きもしない少年の側に、恐る恐る近寄った。

(こんなにうるさ五月蠅くしても見向きもしないってことは、もしかしたら私の声が聞こえてないとか?)

そう思って私は耳元で大きな声を出してみたり、目の前で手を振ってみたりしたが、少年は何事もなかったかのように考え続けている。やはり彼は私の姿を見ることも私の声を聞くこともできないらしい。彼の肩を叩こうとしても私の腕はするりとすり抜け、かえ却って自分をぎょっとさせるだけだった。

(益々幽霊じみてるなあ)

そう考えて、ため息を吐く。いや、きっとこれは夢なんだ、と私は自分自身に言い聞かせてその場に腰を下ろした。それと同時に、難しい顔でさっきからずっと唸っていた彼が、鉛筆を持って目の前のスケッチブックに何かを描き始めた。しかし、ちょっと描いては消し、ちょっと描いては消すというのを繰り返すだけで、白い紙には消しゴムをかけた跡だけが残っていく。そんな彼の様子を、何もすることが無い私はぼんやりと見ていた。

白紙にせっせと線を書き込むその少年は、ごく普通の高校生という感じだった。特別格好いい顔をしているわけでも、不細工なわけでもない。太っているわけでも、痩せすぎているわけでもない。背の高さは座っているため分からないが、精々少し色白なせいか大人しそうに見えるぐらいの、どこにでもいる男子高校生のように私には見えた。どうせ夢ならもっと格好いい人がよかったのに。まあ、私もただの平凡な女子高生なので、人のことをとやかく言えたものではないけれども。そんな感じで観察していると、また行き詰まったのか少年が鉛筆を握りながら深いため息を吐く。

『こんなんじゃ告白どころか、美術展に作品を出せるかも怪しいよ……』

と、いきなりこんな声がどこからともなく聞こえ、私はビクリと肩を震わせた。少し高い男の声だった。もちろん私ではないし、目の前の彼もずっと見ていたが口を開いた様子はなかった。

(じゃあ、誰が?)

そう考え始めたとき、ぐらりと私の視界が揺れた。どんどん目蓋が重くなり、目を開けていられなくなる。夢の中で眠気を感じるというのも変な話なのかもしれないけれど、そのまま私は逆ええない睡魔に引きずり込まれていった。

そして再び目を覚ますと、そこはいつもの私の部屋だった。カーテンの隙間から、眩しい朝の光が漏れている。取り敢えずこの日起きて最初に思ったことは、ちゃんと生きていてよかったということであった。



それから私はその夢の続きを毎晩見るようになった。絵を家に持ち帰ってから四日、さすがにこれだけ同じような夢を見るということは、あの絵には何かあるのかもしれない。そう思うと、店主の言葉が頭をよ過ぎた。確か店主はこう言っていた。「この絵には、ある人が、大切な人に向けた想いがこもっている」と。私は夢のことを聞くため、そして場合によってはハナミズキの絵を返品するためにあの店を探した。けれど、どの辺りにあったというのはちゃんと覚えているのに、何故かあの店には辿り着けず、結局諦めるしかなかった。

一方で、夢の中で何度もあの部屋に行くことで分かったことが三つある。一つ目は、あの少年が絵に触れていると時々彼の心の声のようなものが聞こえること。二つ目は、彼が近々美術展に出す絵のモチーフがなかなか決まらず悩んでいること。そして三つ目は、その美術展でもし賞を取ったら彼はどこかの誰かに告白をする気であることだ。あのハナミズキの絵とまではいかないけれど、絵に関して素人である私にも分かるぐらい、あの部屋に立て掛けてあった彼が描いたらしい絵は素晴らしかった。本当に、素晴らしいとしか言えない自分の語彙力の無さを残念に思うぐらいに。いつもあと一步のところまではいくらしいが、その一步先にいけるかどうか難しいというのは本人談だ。他にも、彼の学校には美術部があっても部室が無くて活動ができないから家で絵を描いているだとか、いろいろと彼について知ることができたがこの場は割愛させていただこう。

そうして今日も、私は夢の中で彼に会う。初めのうちこそ訳が分からずうろたえたが、青春ドラマの中に直接入っているみたいで、この夢を見るのが最近はやっと楽しかったりする。今のところ、最大の欠点は一向に話が進まないということだけれども。

そんなことを考えながら、今日も私は彼から後ろに少し離れたところに座り込んで作業が進んでいるか様子を窺う。と、どうやら今日は進展があったらしい。彼は黒い学生鞆の中から植物図鑑やら写真やらを座卓に出して並べた。

(ハナミズキ、花言葉は「私の想いを受けとめて」、か……)

彼が取り出した物の一つに、そんなことが記されていた。どうやら、モチーフが決まったらしい。ハナミズキ、私が一目惚れをした、あの絵と同じモチーフ。ああ、やっぱりあの絵はこの人が描いたのか。棚の上に目を向けると、デジタル時計が十一月の初めの日付を映していた。確か現実では今日は十二月の中旬だったはずだ。いろいろなことから考えるに、やはりこの夢はあのハナミズキの絵ができるまでを映したも

のなのかもしれない。

再び彼の方に視線を戻すと、私は目を見張った。彼がまるでそれ以外の物は世界に存在しないかのように、一心不乱に紙を見つめ、ハナミズキの木の輪郭を描き起こしていたからだ。彼は、人間とはこんなに集中できる生き物なのか、と思うほど真剣に繊細な線を描いていく。その横顔は、昨日までモチーフが決まらずに散々唸っていた人物とは似ても似つかなかった。どこか神秘的で美しいとさえ私には思えた。そして、何よりその一筆ごとから、彼が誰かに向ける温かい感情が伝わってきた。

『あの子は何が好きだろう。あの子と何を話したらいいだろう』

時折頭に響いてくるその声は優しく、明るい期待が滲んでいた。まるで幼い子供のように、それは純粋な想いだった。

下書きが終わると、彼は取り出したキャンバスにそれを描き写し、もっと細かく描き込んでいく。その表情も、その一線一線も、全ては私が未だ名前すら知らない彼の想い人のためであるのだと改めて思うと、羨ましくも微笑ましくもあった。こんなに一生懸命になれる相手がいる。こんなに一生懸命に想ってくれる人がいる。それはなんて幸福なことだろうか。

こんな幽霊みたいな私には何もできないけれど、せめて応援してあげたい。見届けてあげたい。彼がキャンバスに鉛筆を滑らせ終わる頃には、私はそう思うようになっていた。



日曜日、母についてやってきたショッピングセンターの中の書店で、ふと私は立ち止まった。視線の先にある物は、「イラスト・絵画」のコーナーの文字。昨日夢の中で見た、白い彼の指についた青い油絵の具を思い出す。

彼の絵は順調に進んでいるようだった。鉛筆で描くのを終えた彼は、窓を開けてキャンバスに何やらスプレーをかけた。そしてそれが乾くまでの間、床に敷いてあったカーベットをはぎ取り、その代わり座卓の上と床の一部に新聞紙を敷いて、その上に折りたたみ式の三脚のようなものを立てた。金属製のそれは三本の足のうち二本の間に細い板を渡した物で、二本の足には板を取り付けるためにネジのような形をした出っ張りがあった。学校で見たものとは材質や形が違ふけれど、「イーゼル」と言うやつだろうか。次に彼は、キャンバスの表面を撫でてスプレーが乾いたのを確認すると、窓を閉め、キャンバスを座卓に置いた。そして座卓の上に手際よく油絵の道具を並べ、木製の平たいパレットに青い絵の具を少し出した。それからレモネードの原液のような黄色の液体が入った小瓶を取り出すと、その液体をパレットの上に垂らした。鼻を突く独特の臭いが部屋に広がり、私は思わず眉をひそめた。夢の中でも臭いがするものなのかと、少し不思議に思った。彼はというと、この臭いに慣れているのか顔色一つ変えず、青い絵の具をそれに溶かしていった。溶けた絵の具が初めはマーブル模様を描き、その模様は徐々に細かくなり、最後には模様が無くなり薄い青色になった。そうして出来上がった色を、彼は親指ほどの太さの平たい筆でキャンバスに広げていった。青い絵の具が光を反射して、なみだ海みたいに輝いた。そんな一部始終を見ていたけれど、素人の私には彼が何故そんなことをしているのかあまりよく分からなかった。

少し興味が湧いて、「油絵入門」と書かれた本に背伸びをして指を掛け、引き出す。開いてみれば、道具やら下準備やらの説明が色とりどりの写真付きで並んでいた。最初にキャンバスにかけていたスプレーはフィキサチーフと言って、絵の具を塗るときに鉛筆の線がにじ滲んでしまわないようにするもので、あの独特な臭いのする黄色い液体はペンティングオイルと言って、水彩画における水の代わりのような物らしい。他にも、下塗りがどうだとか色彩の作り方がどうだとかが見やすくまとめられていた。どうやら彼が夢でしていた作業は下塗りという作業らしい。

本に書かれていることの一つ一つを、夢の中で彼がしていたことに当てはめて、頭になじませる。少しだけ彼に近づくことができたようで、なんだかむずがゆ痒く心地

よい喜びがあった。私は彼がしていたことについてもっと知りたくて、つるりとした紙の表面を撫でてページをめくった。



彼が絵の具を使い始めてから数日後、下塗りをしたとはいえ白い生地が透けて見えていたキャンバスは、みるみるうちに色づけられていった。生地が見えているところはもうほとんど残っていない。そしてその日も彼は筆を動かし続けており、私はそれをいつものようにその隣で眺めていた。やっぱりこうして集中している彼の横顔は、綺麗なだと私は思う。いや、もちろん変な意味ではなく。

脇目もふらず、ただその両手に抱えられるほどの大きさの世界にだけ彼の目は向けられている。全てはきっと、私が顔も名前も知らないどこかの誰かのために。そう考えると、少し淋しくなった。

『大丈夫かな……』

「大丈夫だよ、きっと上手くいくよ」

こんなふうに、時々緊張がゆるむのか、彼は口には出さずに弱音とため息を吐く。展覧会について言っているのか、告白のことについて言っているのかは分からないけれど、彼がこういうことを心の中で呟く度に、こうして私は彼に届かない励ましを送っている。彼と話すこともできない、いやそもそも彼が感じている世界にさえない私には、本当にそれぐらいしかできることがないから。うん、きっと大丈夫。だってこんなに彼は相手のことを想っている。それに彼の絵は私をあんなに惹きつけたんだ。これで報われないなんて私が納得できない。

「うん、きっと大丈夫だ」

そう呟いて、私は未だに慣れないペンティングオイルと油絵の具の臭いの中で、体育座りのまま、膝と腕の隙間に少し顔を埋めて、つま先を丸めた。彼は相変わらず私の方を振り返りもせず、筆を握り直して白い絵の具をすく掬っていた。



それは冬休み明けの雪の日だった。雪でいつものバスが遅れることを見越して、私はそれより数本早いバスに駆け込んだ。雪のせいで道路は混み合い、のろのろとバスが進んでいく。考えることは皆同じなのか、いつもより早い時間のものに乗ったにも関わらず、バスの中もなかなか混雑していた。そんな中で、ちらりと何となく向けた視界の端に、彼がいた。サラリーマンの肩と、私と同じ学校の見知らぬ男子生徒の頭の間、その横顔はあった。私は驚いて目を丸くし、最初夢の中で彼を見たときのように叫びそうになるのをなんとか堪えた。まさか彼に夢以外で会うことがあるなんて、誰が思うだろうか？ 驚きからか心臓がばくばくと音をたてる。

彼は夢の中のようなラフな格好ではなく、町の中でたまに見かける他校の生徒と同じ黒い学ランを着ていた。寒さのせいか、いつもは色白の耳が赤く染まっている。そして、彼は誰かと話しているらしく、夢の中と同じようにその視線は私の方を向くことは無かった。一体誰と話しているのかと気になり、人混みの間から見ると、そこには一人の人がいた。

それは、女の子だった。私や彼と同年ぐらいの。黒い、肩につくぐらいのストレートヘアで、清楚な雰囲気ので可愛い女の子。彼と同じ学校の制服を着ている。二人が何を話しているのかは周りの雑音で聞き取れないが、彼は、私が見た事も無いような楽しそうな表情を浮かべて居た。彼女を見る彼の横顔が、夢の中で絵を見つめる彼の横顔と重なる。

(ああ、そうか。この人が、彼が好きな人なんだ)

そう理解すると共に、傘は私の手から抜け落ちた。倒れる傘の音がバスのエンジン音と、近くに座っていた中学生たちのおしゃべりの中に消える。言いようのない虚しさとしの怒りが一瞬のうちに私を通り過ぎ、次にしゅうち羞恥が私を襲った。

バスが停車し、気の抜けるような音と共に私の目の前のドアが開く。いてもたってもいられなくて、私は素早く傘を拾いバスから降りて走りだした。何人かが怪訝な目

で私を見た気がした。その中に彼がいたかもしれない。けれどこんな形で見て欲しかった訳じゃない。背後でバスが発車して、そのまま遠ざかっていった。私は走って、走って、走って、最後に雪に足をとられて、アスファルトの地面に突っ伏した。恥ずかしい。恥ずかしい。恥ずかしい。走っている間も、転んでからも、私の頭の中では呪文のように一つの言葉が繰り返されていた。これじゃ応援するなんて嘘じゃないか。励ましなんて上っ面だけの綺麗事じゃないか。自分を見て欲しくなってしまうんだ。自分のためにあの絵を描いて欲しくなってもどうしようもないじゃないか。みっともない。どうしてこうなったんだよ。いつからだったんだよ。実際に現実を見て気付くだなんて、そんなのあんまりじゃないか。

—ねえ、自分。

立ち上がると、すりむいた膝に血が滲んでいた。足下に目を向けると、少し泥の混じった雪に、差し色のように赤が入っていた。夢の中で彼が白にカーマイン（※1）を混ぜてそれは綺麗なピンク色を作っていたのを思い出して、スニーカーの先で雪をかき混ぜる。当たり前だが、雪の白と血の赤は混ざらず、それどころか泥が混じって汚い色になってしまった。私は眉をひそめて、下唇を少し噛んだ。



家に帰ってから私は、朝のことについてずっと考えていた。ベッドの上でうずくまり、クッションに顔を押しつける。彼と彼女のことについて考える度に、虚しく、悲しく、恥ずかしくなり、それから少しだけ怒りが湧いた。一体いつから私は、彼の好意の向かう先に自分がいたらと考えていたのか。どうしてそんなことをしてしまったのか。

考えているうちにいつの間にか眠ってしまったのか、気が付くと私は彼の部屋にいた。今日も彼は丁寧に筆を滑らせ、草原を描いている。

『明日はあの子に会えるかな』

いつものように、一筆一筆から彼の想いが伝わってくる。けれど、私はそれを今までのようにはもう受け取れなくなっていた。

『顔を見るだけでもいいから、会えたらいいな』

どうして彼の好意を受けるのが彼女なのか。私ではだめなのか。彼を一番見てきたのは私だということに。そんな理不尽でナンセンスなことをとりとめもなく考えた。ぐるりぐるり、その様はまるでマーブル模様のような。考える度に、気持ちの悪い嫉妬が腹の底から這い上がってくるのが分かった。

彼はというと、今日の分は描き終わったのか筆を新聞紙で拭い、四角い透明な容器の赤くて丸い蓋をひねって開けた。筆洗器という筆を洗うものらしい。彼がその中に筆の先を入れてかき回すと、底に溜まっていた絵の具が舞い上がり、透明な液体はすぐに灰色に染まった。



あれから何日が過ぎただろうか。その日も彼は絵を描いていた。彼の絵はどんどん完成に近づいていた。私は部屋の隅から、それを見ていた。深いオリエンタルブルーの夜空に星が散らされ、白地に薄いピンクで色づけられたハナミズキの花がぼろっと浮かび上がる。きつこの日で、この絵は完成する。けれど、それが私にどうしようもない焦燥感を与えた。何となくこの絵が完成したら、この夢を見ることはもうなくなってしまう気がしたからだ。

「ねえ、こっち向いてよ」

そう思うと私はじっとしていられず、体育座りを崩して彼に呼びかけた。最初は小さかった声が、だんだん大きく、怒鳴るようになっていく。けれど、彼はやはりこちらを向かなかった。綺麗だと思っていた、ただひたすら絵に向き合うその姿すら、どこか憎らしく思えた。

そして最後に彼の名前を呼ぼうとして、私はそこで言葉を詰まらせた。自分が彼の名前さえも知らないことに気が付いたからだ。

私の口が、自然と閉じられる。そう、結局のところ、私は彼のことをほとんど何も知らないのだ。

突然、ぐらりと視界が揺れた。目覚めが近いのだろう、目蓋がどんどん重くなる。何度経験しても、この眠気だけは慣れない。そこで、私の意識は現実へと引き戻された。

ゆっくりと目を開けて、ベッドサイドの時計を見る。豆電球の光に照らされた短針は、丁度三の字を示していた。体を起こして、手のひらで顔を覆う。もう、眠りたくない。これ以上、あの夢を見たくない。自分の嫌な部分なんて、知りたくない。きっと千回呼びかけても、彼は私を見てくれない。こんな彼の名前すらも知らない私を、彼のことを知ったつもりになっていた私を、見てくれる訳が無い。唇が震え、閉じたり開いたりを繰り返す。あの日、あの店内を包んでいた光よりずっと濃く暗いオレンジが、この部屋を満たしている。あの日の光景が蘇り、私は店主が言っていたことを思い出した。あの絵は、私以外には貰われたがらないだろうという言葉だ。

恨みがましく唇を噛む。あの夢があの絵に込められた思いならば、何故私が見なければならぬのか。こんな思いなんて、したくなかったのに。どうして、あの絵を買うのは私でなければいけなかったのか。

そこまで考えて、私はタンスの上に飾られたハナミズキの絵を見上げた。もしかして、あの絵を壊せば、もうあの夢を見なくて済むんじゃないか。そんな考えが、頭に浮かぶ。

ベッドから抜け出して、ゆらりと立つ。勉強机の引き出しからカッターナイフを取り出すと、ふらふらとタンスの前へ向かう。その上に立て掛けられたハナミズキの絵に手を伸ばすと、指の腹にキャンバス地の微かなおうとつ凹凸が伝わってきた。ほの暗い部屋で見るその絵は、白い花がいつにもまして強く輝いているようで、怪しげに見えた。カチカチと、カッターの刃を押し出す。こんな絵が無ければ、私はきっとあんな夢を見ることなんてなかった。こんな思いをすることはなかった。私は暗い部屋の中に浮かび上がるハナミズキを睨みつける。カッターを握りしめ、その手を高く上げる。そして、白い花に向けてそれを振り下ろした。

——けれど、それはできなかった。

ハナミズキの絵。その絵にはきっと彼の思いが詰まっている。それは、夢の中でずっと彼を見てきた私が知っている。そんなものを傷つけるということは、彼の思いを傷つけるということだ。あの夢の中で一生懸命に筆を動かしていたその姿を否定することだ。そんなことは、私にはできなかった。だって、私が焦がれたのは、きっと、誰かのために努力する彼の姿だったのだから。

カチャリ。カッターの落下した音だけが、静かな部屋に響く。先ほどまでそれを握っていた右手は、今は力なくぶら下げられている。ぽつぽつと涙がキャンバスを打つ音で、私はようやく自分が泣いている事に気が付いた。流れる涙を拭き、カッターを拾う。出したままの刃をしまめて、勉強机の上に置く。そして、私はハナミズキの絵を抱きしめてベッドに横たわった。その間にも、次々と涙が溢れてくる。次第におえつ嗚咽が混じり始め、また涙を拭う。

私は確かに、彼のことをほとんど知らない。この一ヶ月半と少しの間、夢の中で彼を見てきた私が知っているのは、彼が美術部員であること、油絵を描いていること、そして好きな人に告白するために、どれだけ一生懸命に絵を描いていたかということぐらいだ。逆に言えば、きっと誰よりも彼の努力と覚悟を知っているのは私だろう。

そんな私が、彼を応援しなくてどうする。

気が付けば、私は再び彼の部屋の隅で座っていた。泣き疲れて、いつの間にか眠ってしまったのだろう。

私は腰を上げ、彼の方へと足を進める。一步、二歩と歩いて彼のすぐ後ろに膝をつ



いた。彼の肩越しに、店で見たままのあのハナミズキの絵があった。のびのびと広がる枝に、青やピンクや黄色に薄く色づけられた白い花が、美しく咲いている。

「できた」

そう、小さく彼が呟いた。思えば、彼の口から声を聞くのはこれが初めてかもしれない。喜びが、その声には溢れていた。ことり、と彼がパレットの上に筆を置く。あの絵は完成した。きっとこれでもう、この夢を見ることはなくなるんだろう。私は触れることのできない彼の背に利き手を添える。手のひらに返ってくる感触は無くても、何となく温もりが伝わってくる気がした。そのままその手に、目を閉じてゆっくりと額をつける。

(君の絵が選ばれますように、君の想いが受けとめてもらえますように)

この想いが届くようにと、願う。彼が絵を描くときのように、私も深く意識を沈めて、それ以外を考えないようにする。彼に触れられず、声すら届かない私には結局これぐらいしかできることはないけれど、それでもないよりはマシかもしれない。ああ、君の努力は誰より私が知っている。なかなかテーマが決まらなかったことも、順調に進んでいるように見えて何度も行き詰まっていたことも、そしてあの真剣な眼差しも、みんな私が知っている。大丈夫、きっと君は上手くいく。それは上っ面なものではなくて、紛れもない私の本心だった。

「好きでした、ありがとう」

願いの最後に、私は小さな声でそんな言葉を添えた。

目が覚めると、腕の中にあつたはずのハナミズキの絵は、最初からそこには何もなかったかのように消えていた。



あれから数週間が過ぎた二月中旬、私はある美術館に足を運んでいた。目の前には、あの日私の腕の中から消えたハナミズキの絵が飾られていた。絵の題名は、「私の想いを受けとめて」。ハナミズキの花言葉だ。その横には、入賞の文字が並んでいる。真っ白な壁に飾られたその絵は、以前よりもずっと美しく見えた。

入り口の方から声が聞こえて、振り返る。するとそこには、今まさに場内に入ってきた彼とあの子がいた。二人が何を話しているのかまでは聞き取れないが、楽しそうにしているのを確認すると、私は絵に向き直った。彼は彼女と上手くいったのだろうか。うん、きっとそうだろう。だってあんなに仲むつまじい様子だったのだから。そう考え終わって私が帰ろうとしたとき、突然背後から話しかけられた。

「その絵、僕が描いたんです」

聞き慣れた声に振り返ると、私の数歩後ろに彼がいた。私は緊張した面持ちの彼を見て一瞬目を見開いたが、すぐになんでもないように表情を取り繕った。

「綺麗ですね」

美しく咲き誇るハナミズキを見て、そう言う。

「ありがとうございます」

彼は私の言葉にそう返して、左隣に並んだ。視線を彼に向け直せば、彼は頬を掻いて照れたようにはにかんでいた。色白の肌がほんのり桃色に色づく様子は、ハナミズキの花に似ている。そんな彼の肩越しに、彼女の姿が見えた。彼女は五、六点離れた場所にある、彼女の背丈ほどもある作品を眺めている。

「あの、彼女さん、放っておいていいんですか？」

私が気になってそう尋ねると、彼は私の視線を辿って振り返った。その先に彼女がいることに気が付くと、彼の目は見開かれた。数秒間、彼の表情が固まる。どうしたのかと、彼に呼びかけようとしたとき。

驚いたことに、あわてて彼は首を横に振ったのだ。

ぶんぶん首だけでなく手も振って、彼は私の言葉を否定した。

「違います、違うんです！ 彼女はそういうのじゃなくて、同じ部活の友達なんです！ 今日一緒に来たのは彼女の作品も入賞したからで！ 第一、僕が好きな人は貴

女であって……」

そこまで言って、彼はしまったというふうに口をつぐ嚙むと、顔を真っ赤にさせた。誰もが静かに作品を眺めている中、急に大きな声を出したせい、周りの人が私たちの方を向く。彼が友達だと言った少女にもそれは聞こえていたらしく、こちらを向いて「よくやった」とでも言いたそうな顔をしていた。けれど、そんなことよりも彼の言葉で私の頭の中は埋め尽くされていた。混乱と恥ずかしさ。けれどそこには同時に、喜びがあった。諦めていた感情が返り咲くのと比例して、私の頬も紅潮していく。そして、あの絵が私以外に貰われたがらない、というのはこういうことだったのかと、欠けたパズルのピースが揃ったようなすがすがしい感覚もまたしていた。

赤い頬のまま、彼は仕切り直すように咳払いをして、私にこう言った。その目は真っ直ぐに、私を見ていた。

「取り敢えず、名前、教えてもらえますか？」

それに対して私はといえば、赤い顔で恥ずかしそうにしながらも真剣な表情をする彼の様子と、自分がしていた勘違いがなんだかおかしくて吹き出してしまった。そしてそれを見てうろたえる彼に、やはり赤い顔のまま笑顔でうなずいたのであった。

その後紆余曲折を経て付き合い始めた頃、なんで私を好きになったのかと彼に聞いたところ、返ってきたのはシンプルな答えだった。

それは、いわゆる一目惚れというやつであった。

注釈

※1 カーマイン……わずかに紫がかった赤色

[戻る](#)